

# 育てる人材像を明確化

## 苦難と挑戦

県立大50年の歩み

⑤

大学間競争を生き抜くため、公立大として存在意義を示すため、何をすべきか。導き出した答えは、学部学科をほぼすべて見直すという「大改革」だった。2016年4月、県立大は3学部7学科制を5学部9学科制に再編。育てる人材像を明確に打ち出した。

大幅な再編は県立長崎シーボルト大と統合した08年以来。創立以来存続していた経済学部の消

滅、高度な学問より実践力育成に重きを置いた教育カリキュラム…。「経済学部がなくなるのは寂しい」「そもそも高度な学問を教えるのが大学の使命ではないか」。内外に反発や懸念の声は少なくなかった。

「学生にとっても、そして卒業後の受け皿になる就職先にとっても魅力的な大学になる必要がある。何より『県立大は変わるんだ』という意識が

## 学科再編



国際社会に通用する「即戦力」の育成に向けた国際経営学科のフィリピン・セブ島での語学研修  
＝2016年9月

必要だ」

大学幹部は慎重派に説明を繰り返し、何とか実

現にこぎ着けた。

◆ 新生「県立大は、社

会の即戦力となる学びを重視する。新設した「情報システム学部」は国内に不足しているITセキュリティ技術者の養成を掲げる。経済学部を再編した「経営学部」は、国際的に活躍できる人材を育てるためにアジア諸国での語学研修やビジネス研修を導入。地域に照準を合わせた「地域創造学部」も用意した。さらに全国的に問題となっている人口減少が著しい県内離島でのフィールドワークを全学生に必修化した。

県政の課題に対応しつつ、現代社会に求められる人材を育成する。こうした独自性を打ち出した結果、志願倍率は再編

前より上昇した。経営学部国際経営学科では、英語能力テストTOEIC(990点満点)の730点以上を卒業要件に設定。16年度入学生は当初、平均点数が400点前半だった。高すぎるハードルに「リタイアする学生が続出するのは」と心配もあった。しかし、現在は平均700点を超える成長を見せている。

「学力は着実に上がっている」  
学長の太田博道(74)は手応えを口にし、気を引き締めるようにこう続けた。

「来年度は再編初年度の入学生が3年生になる。培った基礎力をどう応用できるか、社会に必要な人材に育てられるか。大事な年になる」

＝文中敬称略＝  
(中島宙)